2025. 3. 31

共働き夫婦の収入と家事分担のバランス

～いつも自分ばかり家事をしていると感じる実態とは？～

経済調査部　エコノミスト
木村　彩月

ポイント

- **共働きが一般化し、妻の正規雇用比率は上昇。妻の経済的貢献度が高まるなか、約 4 割の妻が夫の家事に不満を持っている。当研究所のアンケートでは、年収 400 万円以上の妻にたずねた年収比が「夫 5.0 割：妻 5.0 割」で均衡した結果となった一方、家事分担は「妻 6.2 割：夫 3.8 割」で妻の割合が高い**
- **しかし、年収 400 万円以上の妻を持つ夫側の回答を見ると、家事分担の割合が「妻 4.7 割：夫 5.3 割」と、夫婦間で概ね家事分担のバランスが取れているとの認識が示された**
- **夫婦間で家事だと認識している範囲に相違があるほか、相手が行なっている家事を把握しきれていない可能性がある。夫婦の家事分担が必ずしも経済力に比例する必要はないが、相手がしてくれている家事は何か関心を持つと同時に、普段自分がしている家事は何か、夫婦で伝え合っていくことが欠かせない**

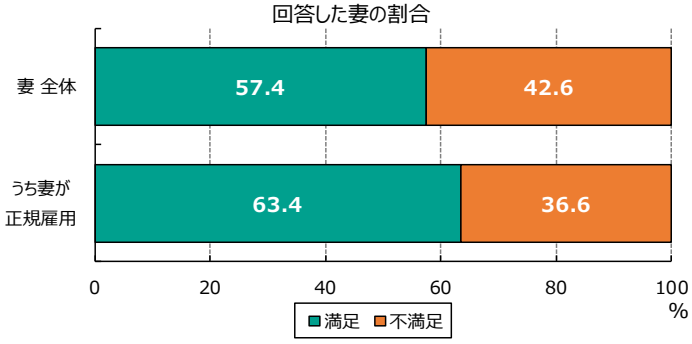
１．4 割の妻は夫の家事に不満

総務省の「労働力調査（2024 年）」によれば、夫婦共働き世帯数は 1,300 万世帯と、専業主婦世帯（508 万世帯）の約 2.5 倍となっており、共働き世帯比率（共働き世帯数÷共働き世帯と専業主婦世帯の合計数）は 71.9%と 7 割を超えている。また、働く妻の正規雇用比率の上昇等に伴い、夫婦の世帯収入は 20～30 代を中心に飛躍的に増加している（2024 年 6 月 6 日付レポート「20～30 代共働き世帯の所得は飛躍的に増加」）。そうしたなか、共働き世帯において、家事をどのように分担しているかはジェンダーの観点からも注目される。

国立社会保障・人口問題研究所の「第 7 回全国家庭動向調査(2023 年)」によると、夫の家事に対する妻の評価について、「不満足」との回答が 42.6%と約 4 割となっている（図表 1、本設問は妻側のみ対象のため、夫側へ同様の設問はない）。妻が正規雇用の場合に限ると 36.6%とやや割合は低下するものの、いずれにしても 4 割近くが不満を抱えている。

当研究所では、2023 年 3 月に全国の 18～54 歳の男女 7,453 名を対象に「恋愛・結婚に関するアンケート調査（以下、アンケート）」を実施した。本稿では、

（図表1）夫の家事に対して「満足」、「不満」と回答した妻の割合



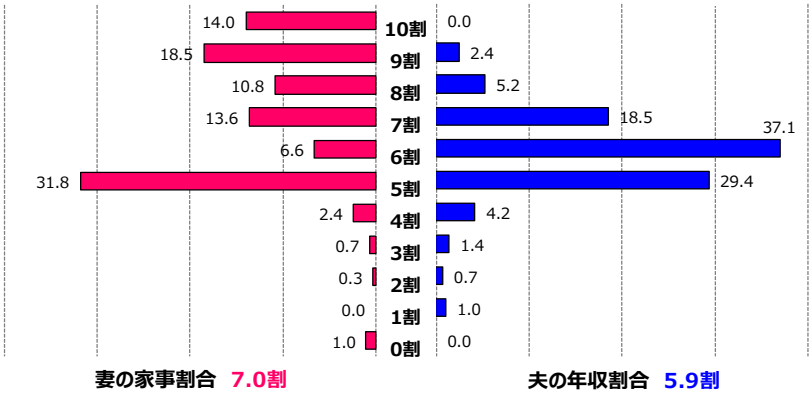
（出所）国立社会保障・人口問題研究所

このアンケート結果をもとに共働き夫婦の年収と家事分担の関係について考察する。

２．妻が正規雇用の共働き夫婦、年収は夫 5.9 割、家事は妻 7.0 割

アンケートでは、結婚経験のある人を対象者に、夫婦間の家事の分担割合、自身と配偶者の年収をたずねる設問を設けている。この回答結果をもとに、正規雇用の妻の回答者（287 名）における、夫婦の家事分担と年収の割合を集計すると、妻の家事割合は 5 割（回答者のうち 31.8%）との回答が最も多くなっているが、9 割（同 18.5%）や 10 割（同 14.0%）との回答も多い。すべての回答結果を加重平均すると、家事分担では「妻 7.0 割：夫 3.0 割」との結果が示された（図表 2）。一方、夫の年収割合は 6 割（同 37.1%）との回答が最も多く、次に 5 割（同 29.4%）と、5 割と 6 割を合わせると全体の 2/3 以上を占めており、夫婦の年収比は「妻 4.1 割：夫 5.9 割」となった。夫婦間での年収差は縮小しているとみられるものの、夫婦の家事分担の割合については年収差ほどには差が縮まっていない様子が示されている。

（図表2）共働き夫婦の年収と家事割合　単位：%



（出所）明治安田総研「恋愛・結婚に関するアンケート調査」

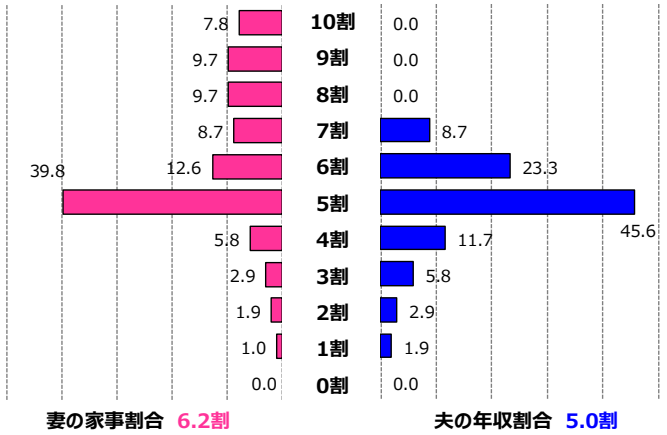
３．かみ合わない夫婦の家事分担割合

また、アンケートで自身の年収が 400 万円以上の妻の回答（103 名）に絞ると、夫婦の年収比は「夫 5.0 割：妻 5.0 割」と収入面で均衡がとれているとの結果が得られたが、それでも家事分担の割合は「妻 6.2 割：夫 3.8 割」となっている（図表 3）。

もっとも、図表 2 や 3 で示した家事分担の割合は妻側の回答を集計したものである。夫側の回答に目を向けると異なる認識が見えてくる。年収 400 万円以上の妻を持つ夫の回答（234 名）を見ると、まず、夫婦の年収比は「夫 5.2 割：妻 4.8 割」と概ね均衡しており、妻側の結果とも同様の結果となった。しかし、家事分担の割合については「妻 4.7 割：夫 5.3 割」と、こちらは妻の認識とは異なり、概ね均衡しているとの結果となった（図表 4）。夫側では、年収も家事分担の割合も夫婦間でバランスが取れているとの認識が示されている。

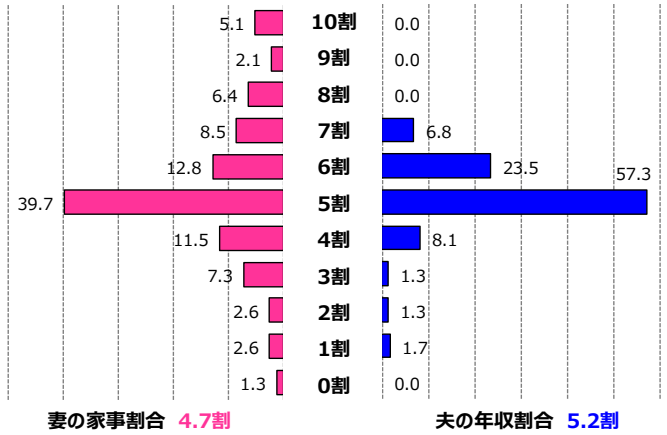
妻の年収が 400 万円以上の共働き夫婦について、夫側と妻側の家事分担の回答を比較すると、妻の 88.3%が

（図表3）共働き夫婦の年収と家事割合（年収400万円以上の妻の回答）



（出所）明治安田総研「恋愛・結婚に関するアンケート調査」　※単位：%

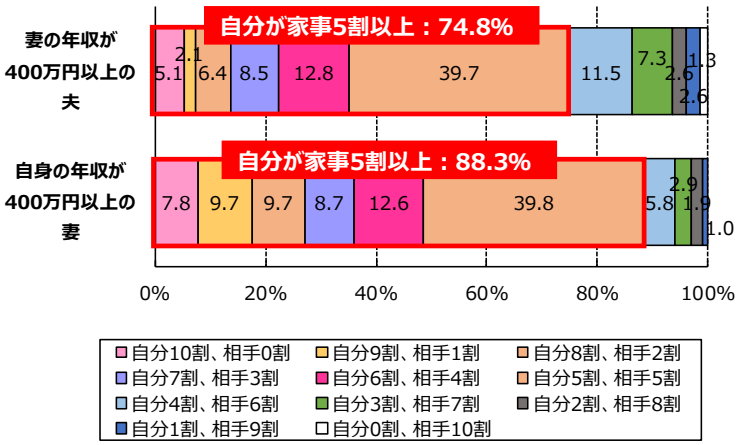
（図表4）共働き夫婦の年収と家事割合（年収400万円以上の妻を持つ夫の回答）



（出所）明治安田総研「恋愛・結婚に関するアンケート調査」　※単位：%

「自分が５割以上」家事を行なっていると回答しているのに対し、夫も 74.8%が「自分が５割以上」家事を行なっていると回答している（図表 5）。夫の約７割は“自分も家事を十分担っている”と認識しており、家庭内の家事分担の認識に、夫婦間で大きなズレが生じてしまっている。夫婦間で家事だと認識している範囲に相違があると考えられるほか、お互いに相手が行なっている家事について把握しきれていないことが示唆されている。

（図表5）共働き夫婦の家事分担



（出所）明治安田総研「恋愛・結婚に関するアンケート調査」

もちろん、夫婦の家事負担が必ずしも経済力に比例する必要はなく、常に平等でなければならないというわけでもない。各家庭の事情や個々の特性、ライフステージに応じて、柔軟かつ多様な役割分担があってしかるべきである。しかし、家事負担の実態に対する認識が当事者間で共有されず、その貢献度を互いに適切に評価できていない場合には、不公平感が高まり、結果として夫婦関係の悪化にもつながりうる。労働時間に加え、業務難易度がある程度反映された「年収」「給与」として数値化されている仕事と違って、家事は家事毎の精神的負荷の程度が可視化されづらく、単なる作業時間では実態を十分に把握しきれない側面もあるため、夫婦の認識相違が生まれやすくなってしまっている。

また、最近では、〝名もなき家事〟という言葉が SNS などでもよく見かけられるようになった。トイレットペーパーなど日用品の交換や補充、リモコンや時計の電池交換など、ひとつひとつは些細な作業で、炊事、洗濯といった具体的な名前もないため、見落とされがちである。しかし、これらも欠かすことのできない家事であり、負担感も確実に存在する。〝名もなき家事〟については、その存在に気付いていなければ、感謝を伝えることもできない。いつも自分ばかり家事を負担していると思っていては夫婦関係にもヒビが入る。夫婦円満のためにも、相手がしてくれている家事は何か関心を持つと同時に、普段自分がしている家事は何か、夫婦で伝え合っていくことが欠かせない。

本レポートに関するご取材やお問い合わせは以下までご連絡ください

明治安田総合研究所 経済調査部 エコノミスト 木村 彩月

電話番号：03-6261-7947

e-mail：sa2-kimura@myri.co.jp

※本レポートは、明治安田総合研究所が情報提供資料として作成したものであり、いかなる契約の締結や解約を目的としたものではありません。掲載内容について細心の注意を払っていますが、これによりその情報に関する信頼性、正確性、完全性などについて保証するものではありません。掲載された情報を用いた結果生じた直接的、間接的トラブルや損失、損害については、一切の責任を負いません。またこれらの情報は、予告なく掲載を変更、中断、中止することがあります。

●発行元● 株式会社明治安田総合研究所　〒102-0073　東京都千代田区九段北3－2－11　TEL03-6261-6411